



# 瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

年間第 20 主日 B 年 (2024 年 8 月 18 日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：箴言 9 章 1—6 節

第二朗読：エフェソの信徒への手紙 5 章 15—20 節

福音朗読：ヨハネによる福音書 6 章 51—58 節

## 食べる

『箴言』に登場する「知恵」について

第一朗読は『箴言』の一節です。旧約聖書には三つのジャンルがあります。「モーセ五書」、  
「歴史書」、「諸書」です。『箴言』は「諸書」に当てはまります。内容的には人生の教訓に関する  
ものです。作者は、1 章 1 節からソロモン王とするのがユダヤ教とキリスト教の伝承ですが、  
この書の全体を眺めてみると、部分的にソロモン王に由来する箇所 (10 章 1 節、25 章 1 節)  
はあるものの、すべてをソロモン王が書いたとは言えないでしょう。ソロモン王の時代 (在位：  
紀元前 965—926 年) は繁栄と平和の時代でした。文化も発展しました。ソロモン王はエジプ  
トの宮殿をモデルにして、学者たちを招いて、人生の教訓、格言を口述筆記させたのだと思わ  
れます。これが『箴言』のもっとも古い層となります。その後、ユダの王ヒゼキヤ (在位：紀元前  
726—698 年) の書記官たちによって教訓的な文言が集められました。書全体の構成ができ  
あがりました。

今日の第一朗読の箇所は、『箴言』全体の前書き (1—9 章) にあたる部分から採られていま  
す。この書は『申命記』や『イザヤ書』、『エレミヤ書』からの影響が強いので、おそらくバビロ  
ン捕囚以降、紀元前 3 世紀に記されたと考えるのが通例です。そうしますと『箴言』は、紀元前  
6 世紀から 5 世紀にかけて、さまざまな人々から伝えられた実践的な教訓を集めた書物となり  
ます。そして、巻頭と巻末に別な時代の文書が加えられて、最終的に紀元前 2 世紀には今のよ  
うな姿になったと考えてよいでしょう。

今日の朗読箇所は、8 章から続く「知恵」に関する記述です。1 節の「知恵は家を建て」に注

目してみてください。ヘブライ語のももとの意味は「切り出す」だそうです。それを「建てる」と訳しました。知恵を、あたかも人間のようにあつかう擬人法ぎじんぼうが用いられています。知恵は王さまけんいのような権威をもっていて、立派な宮殿や神殿のような家に住んでいるのです。

さらに、2節の「整え」ととのくぼにも目を配ってみてください。擬人化された知恵は犠牲いけにえを屠ほふって、祝宴しゆくの準備をします。この祝宴では強いぶどう酒が提供され、贅ぜいを尽くした食べ物つの数々は知恵の賜物たまものの豊かさあんじを暗示します。祝宴の比喻ひゆは、救い主がもたらす賜物たまものを指し示します。

## 説教：食べる

福音朗読の51節にある「食べる」に注目してみましょう。ギリシア語では「食べる」を表す単語は二つあります。「エスシオー」と「トローゴー」の二つです。前者は「食べる、食事をする」の意味です。一般的な「食事をする」を指します。後者は「かみ砕くくだ、音を立ててかじる」の意味があります。ここから発展して「動物が餌えさを食くらう」の意味もあります。

「トローゴー」は、新約聖書では6回だけ使われています。『マタイによる福音書』24章38節以外はすべて『ヨハネによる福音書』での用例ようれいです。13章18節では「わたしのパンを食べている者が」とあります。これは「トローゴー」の用例の一つです。一緒に食事を食らうほどの仲あいだからのよい間柄という意味です。これ以外の「トローゴー」の用例は6章に集中しています。しかも今日の福音朗読の箇所箇所に登場します。54－57節で3回、58節の後半で1回使われています。

51節で「このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる」とありますが、これは「エスシオー」が使われています。東京教区の雨宮師は、「み言葉の内にさし出されたイエスを信じる」という意味で「食べる」(エスシオー)が使われていると解釈かいしやくしています。それに対して「食べる」(トローゴー)は「ご聖体のうちにさし出されたイエス自身を本当に食べる、つまり口を使って食べることによって「イエスを」受け取る」と解釈しています。

日本語では「食べる」ですが、「エスシオー」と「トローゴー」の二つの動詞を使い分けることで、み言葉をいただくだけでなく、[ホスチアの形の]ご聖体を食くべることの必要性きようちようが強調されているようです。